

第三講

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

初秋風けしきだちて、艶ある夕暮に、大臣渡り給ひて見給へば、姫君、薄色に女郎花などひき重ねて、几帳きちやうに少しはづれてる給へるさまかたち、常よりもいふよしなくあてに匂ひみちて、らうたく見え給ふ。御髪いとこちたく、五重いづへの扇とかやを広げたらむさまして、少し色なる方にぞ見え給へど、筋こまやかに、額より裾までまよふ筋なく美し。ただ人にはげに惜しかりぬべき人がらにぞおはする。几帳おしやりて、わざとなく拍子ひやうしうちならして、御箏ことうひかせたてまつり給ふ。折しも中納言まゐり給へり。「こち」とのたまへば、うちかしこまりて、御簾みすの内にさぶらひ給ふさまかたち、この君しもぞまたいとめでたく、あくまでしめやかに、心の底ゆかしう、そぞろに心づかひせらるるやうにて、こまやかになまめかしう、すみたるさまして、あてに美し。いとどもてしづめて、騒ぐ御胸を念じつつ、用意を加へ給へり。笛少し吹きならし給へば、雲うにすみのほりて、いとおもしろし。御箏の音ほのかにらうたげなる、かきあはせのほど、なかなか聞きもとめられず、涙うきぬべきを、つれなくもてなし給ふ。撫子なでこの露もさながらきらめきたる小袿こゝろまに、御髪はこぼれかかりて、少しかたぶきかり給へるかたはら目、まめやかに光を放つとはかかるをやと見え給ふ。よろしきをだに、人の親はいかがは見なす。ましてかくたくひなき御ありさまもなめれば、よにしらぬ心の闇にまどひ給ふも、ことわりなるべし。

〔注〕 ○大臣——右大臣山階実雄。 ○姫君——実雄の娘、倍子。 ○中納言——倍子の兄、公宗。
○心の闇——「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」〔後撰集・藤原兼輔〕に
よる。

設問

(一) 傍線部ア・ウを、だれのことか明らかにできるように現代語訳せよ。

ウ	ア

(二) 「そぞろに心づかひせらるるやうにて」(傍線部イ)とはどういふことか、説明せよ。

--